# 第八条　息継ぎの次第

底本：高知本　対校本：鴻山本・演博本

## 【翻刻】

第八　噫次之次第

いきつきの曲ハいかなる謡にもおほくある事也。いきのつまる事あらハ、とむるてにはの文字を一つすてゝ云。又うたひとむる所のなかく引字有へし。其引文字を引すしていきを次へし。かづら女なんとのうたひに噫次のあら〳〵しくぎちつきたるハすへて聞にくし。噫の次やうハいかにも〳〵静に次をよしとす。惣して噫つきと云ハ一字をいはすしていきにするなり。句次といふハうち切時噫をつがすに云てうたひ出す事也。たとへハ「千代の声のミいやましに　いたゝきまつるやしろかな　〳〵」。此「いやましに」の「に」の字をひかすしてうたふ。

八嶋「浦風まてものとかなる　はるや心を」

野々宮「きてしも①あらぬかりの世に　ゆきかへるこそうらみなれ　〳〵」

井筒「夢心　何の音にかさめてまし　〳〵」

錦木「千度百夜いたつらに　くやしき頼ミなりけるそ　〳〵」

御衣すそ「枝をならさぬあめつちの神のいとくハ有かたや　〳〵」

当麻「法の庭にましるなり　〳〵」
　右かやうにまわして行字をまハさすしてうたひてあちハひよきを噫つきの曲といふ也。

**【校異】**

①あらぬ―あかぬ（鴻・演）

**【語釈】**

○**打切**…ここでは現代の句と句の間の囃子の手を指す打切ではなく、小段の終わりの段落となる部分と解した。

**【現代語訳】**

第八　息継ぎの仕方

　息継ぎを含むフシは、いかなる謡にも多くあるものである。息が続かなくなるようならば、息が途切れるところにあるてにをはの文字を一文字、省略し、そこで息継ぎをして謡う。また一句の終わりの謡い止める所で、長く音を引いて謡う字が必ずある。その文字を長く伸ばさないで、息を継ぎなさい。三番目物の蔓物などでの謡で、息継ぎの音が激しい勢いで悪目立ちするのは、すべて聞いて不愉快に感じる。息の継ぎ方はどうあっても静かに息を吸うのがよい。概して息継ぎというものは、一文字分を言わないでその文字分を息を吸うのにあてるのである。句継ぎというのは、小段の終末部分の句を息を吸わないで続けて謡い始める事である。たとえば「千代の声のみ弥増し

に。戴きまつる社かな戴きまつる社かな」（放生川［上歌］）この「弥増しに」の「に」の字を引き伸ばさないで謡う。[1]

放生川［上歌］「千代の声のみ弥増しに。戴きまつる社かな戴きまつる社かな」（大成版）

屋島［上歌］「浦風までも長閑なる。　春や心を」（元和卯月本）

野宮［上歌］来てしもあらぬ仮の世に。「行き帰るこそ恨みなれ　〳〵（元和卯月本）

井筒［上歌］夢ごころ。「何の音にか覚めてまし　〳〵（天理一七二番）

錦木［上歌］千度百夜いたづらに。悔しき頼みなりけるぞ　〳〵（天理一七二番）

御裳裾「枝をならさぬあめつちの　神　のいとくハ有　かたや　〳〵」（天理一七二番）

当麻「法の庭にましるなり　〳〵」（元和卯月本）

右の例はこのように廻しを謡う字を、廻しの二文字目の産み字を言わないで息継ぎにあて、よい味わいを出すのを息継ぎのフシというのである。

## 【解説】

謡の拍子合部分は、七五調の十二文字の詞章を八拍に当てはめる。等間隔で打たれる拍を息継ぎによって中断すれば、音楽の流れは途切れてしまう。このため拍のビートに乗りながら巧みに息継ぎをする仕方が説かれる。まず、一句の途中で息が続かなくなったときには、聞き取れなくても文意があまり壊れることがない、てにをはの文字を言わずにそこで息継ぎをすることで、リズムを崩すことなく息が継げるとする。あるいは一句の終わりの長く伸ばす箇所を息継ぎにあてる。謡を謡っていくうえでは、一句の終わりまでなんとか息を継がずに謡いつづけることはよくあることであるが、特に三番目物などの静かな曲でようやく息を吸えるからと言って派手に音を立てて息を吸うのは興ざめだから、静かに息継ぎをするようにという。

こうした八拍子のビートから外れぬように息継ぎをする基本的な技法だけでなく、筆者はさらにそれを一歩進めて、息継ぎを歌の表現力として用いる高等テクニックをも授ける。例に挙げられるのは、いずれも［上歌］の終末の三句で、ひとつの小段の締めくくりとなる終止感・段落感の強い部分である。まず末尾から三句目では多くの場合、小鼓の「オドリ」の類が打たれるとともに、テンポがいったん緩んで、終末の繰り返しからなる二句へと向かう準備がなされる。ツヨ吟の曲では「オサエ」という一音低める謡い方をする（ふたつの連続する下げ胡麻によっ

てオサエが記譜される）。ヨワ吟の曲では、概して下ノ句の最後の文字で廻しが謡われ、産み字によって音が一文字分だけ下がる箇所である。この廻しの産み字を息継ぎに当てるのが筆者の主張であり、高等テクニックである。息継ぎをあたかも音がかすれ、消え入るかのように聞かせる技巧であり、テンポの緩みをより強調し、段落感を出すのである。

なお譜例は、屋島と放生川はツヨ吟であり、廻しはない。おそらくふたつの連続する下げ胡麻で示されるオサエで同様のテクニックを行ったと推察する。また当麻では末の二句のみの例が挙がるのは、末から三句目に廻しもオサエもない特殊事例のためであると思われる。

**注**

（1）以下の譜例では、廻しを記すとともに、廻しがない場合には、廻しがあるべき上歌末から三句目の最後の二文字の胡麻を記した。おもに元和卯月本（国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1288060 など）に基づき、元和卯月本にない曲は天理大学図書館所蔵「謡曲一七二番」の節付けを記した。さらにそれらにない場合（放生川）は大成版を参照した。

（丹羽　幸江）